



バッハの森通信

第 146 号
2020 年
1 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

バッハを歌うために

異文化を楽しく学ぼう

新年、おめでとうございます。皆様、お元気に年の初めをお祝いなさいましたか。そして、新しい年の目標を、秘かに考えたり、家族や友達と語り合ったりなさいましたか。私も新しい年に寄せて、個人的な状況と関連していささか思ったことがありましたので、そのことについて、少々お話しします。

* * *

個人的状況とは、昨年 12 月に 88 歳になり、バッハの森の友人たちから、稲穂付きのカードでお祝いしていただいたことです。現在、私は、バッハの森のプログラムに追われて、自転車操業的な生活をしているせいでしょうか、普段、年齢を意識することはほとんどありませんが、年齢は正直です。やはり終活を始める時になったかな、と悟りました。

では何をしたらいいのか、と考えてみて、結局、現在していることをもっと皆さんに分かってもらえるよう努力するという、変わり映えしない答えになりました。そこで、先ず現在、私が何をしているか説明すると、バッハの森のいろいろなプログラムに提供するため、主にバッハのカンタータとそこに使用されているコラルの歌詞を読み返し、その結果として、ドイツ語、ときにラテン語と日本語の対訳を作成したり、前に作成した歌詞を修正したりしています。その際に、これら宗教詩の源泉である聖書に戻って、歌詞の意味を考えることとなります。

このような説明をすると、バッハの森は難しそうなどころですね、とても参加する気になりません、という方がいても驚きません。しかし、ちょっと立ち止まって考えてください。バッハの音楽は、そも

そも日本人にとっては「異文化」なのです。だから難しく当然です。そうかと言って、バッハの森では、もっぱら私がしている歌詞の対訳作りの作業に参加することを、(奇特的な希望者がいれば歓迎しますが)、決して誰にも要求いたしません。まずは私が作成した対訳を参考に、バッハの意図を汲んで彼の音楽を楽しんでくだされば十分だと考えています。

嬉しいことに、このような私の願いは、バッハの森で本当に実現しています。その証拠に、『バッハの森通信』本号の「レポート欄」に、昨年の「秋のシーズン」にバッハの森で開かれた種々のプログラムを楽しんだ方々が、素晴らしい感想を寄稿してくださっています。是非、ご覧になってください。なお、そこに、ある方が年賀状に「クリスマス・コンサートはしみじみと心に残る時間でした」と書き添えてくださった言葉を追加しましょう。

* * *

このように、私の翻訳作業がある程度役立っているようですが、すでに申しました通り、今年は、これらバロックの宗教曲が何を語っているのか、更に分かり易く説明したいと考えています。そのためにドイツ語やラテン語を、もう少し説明する必要があるようですが、今まで通り、子どもが外国語を自然に覚えるように、出て来た単語や用法を理解してもらう方法で十分だという考えは変わりません。

より難しい問題は、これら聖書に基づく歌詞の世界観、人生観などの説明です。しばしば「短く、一言で」と要求されるので、それに応える努力をしてみましよう。例えば、聖書巻頭の天地創造の物語は、神様が 6 日間で天地を創造した後、ご覧になるとすべては実に良く出来ていた、と伝えます。「6 日間」の説明は後回しにして、私たちが歌う歌は、世界が「実に良く出来ていた」という考えに基づいているという説明はどうでしょうか。(石田友雄)

地に平和

強い者勝ちに未来はない

*このメディタツィオは、12月8日に開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読されました。

イエス・キリストがお生まれになった夜、天使が羊飼いたちに現れ、救い主の降誕を告げると、続いて天の大軍が現れ、「いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人々にあれ」と讚美の言葉を唱えた、とルカによる福音書が伝えます。この牧歌的な物語とは対称的に、マタイによる福音書は、ヘロデ王に命を狙われた幼な児イエスが、辛うじてエジプトに逃避した後、ベツレヘムと周辺一帯にいた2歳以下の男の子全員が殺害され、母親たちの嘆く泣き声ははるかかなたまで聞こえた、と恐ろしい事件を報告します。

マタイはこの事件に先立って、東の国から占星術の学者たち、すなわちペルシャのマジがエルサレムに来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか。私たちはその方の星を見たので、拝みに来ました」と尋ねたので、驚いたヘロデ王は律法学者たちを集めて調べさせたところ、「メシアはベツレヘムで生まれる」という答申を得たので、東の国から来た学者たちに「ベツレヘムに行き、生まれたばかりの幼な児を探し、みつかったら報告せよ」と命じたと語ります。言うまでもなく、ベツレヘムはダビデの故郷であり、メシアはダビデの子孫から現れるという伝承に基づくお話しです。

幼児まで肅正して守る王権

それにしても、何でヘロデはユダヤ人の王の誕生をこれほど恐れたのでしょうか。彼は元々ユダヤ人ではありませんでしたが、ローマの権力者たちに巧みに取り入り、それまで約100年間ユダヤを支配していたユダヤ人の王朝、ハスモン家に代わってユダヤ王になった男です。ユダヤ人を支配する足場を固めるため、ハスモン家の王女を王妃にしましたが、その後、王妃と彼女の間生まれた自分の息子の王子たちが、ハスモン家の再興を企んでいると疑い次々と処刑しました。

ですから、自分の王位を守ることに熱心になる特別な理由がヘロデにあったことは事実ですが、ベツレヘム近郊の全ての幼な児を殺戮したヘロデが、特に残虐な王であったわけではありません。古今東西を問わず、王位継承に際して権力闘争に勝った者は、敵は勿論、しばしば異母兄弟まで処刑したことはよく知られています。将来、王位を狙う可能性があると考えられた者は、全員、たとえ幼な児であっても容赦なく肅正したのです。

それほどまでにして王が王位を守った理由は、絶対権力者である王の安定した統治を人々も望んでいたからです。王位を巡る権力闘争がいつまでも続いては困るのです。国を平和に維持し経済的繁栄をもたらすこと、それが王の使命でした。そのために王は強くなければなりません。法律はありましたが、それを執行する権限は王が持っていたから、結局、王政という制度は王を頂点とする強い者勝ちの体制でした。ですから王は、自分の王権に不満を持つ者たちを武力によって鎮圧排除することによって平和を維持したのです。

「インマヌエル」誕生の預言

ヘロデが強大な王であったことは、パレスチナ各地に彼が残した大建築物の遺構からも分かります。特にエルサレム神殿を、当時、世界有数の壮麗な神殿に大改築したことは有名です。しかし、マタイは別にヘロデが強大な王であったことを伝えたわけではありません。ユダヤ人の王の誕生を伝える星を占星術の学者たちが発見したことを語るマタイのエピソードには、重要な前置きがあります。先ず42代にわたる長い系図によって、イエス・キリストがダビデの子孫であることを証明し、続いて天使が、マリアの許婚(イフズク)のヨセフに、彼女が聖霊によって身籠もったことを告げます。そして生まれてくる男の子をイエスと名付けるよう命じ、この子はかつて預言者が「インマヌエル」と呼んだ者であると知らせます。

「インマヌエル」とは、ヘブライ語で「神が私たちと共におられる」という意味です。これは紀元前700年頃、預言者イザヤがエルサレムでユダの王アハズに告げた言葉です。その頃、北イスラエルとダマスコが同盟を結んで攻め寄せて来そうな情勢になったとき、イザヤは神の守護を信頼して静観しているよう勧めましたが、アハズ王が右往左往するので、将来ダビデの家に「インマヌエル」と呼ばれる男の子が生まれ、

「神が私たちと共におられる」ことを示してくれると預言しました。この預言は、後に「メシア預言」と呼ばれるようになります。ダビデ王家の王が即位式で油を注がれ、ヘブライ語で「メシア」と呼ぶ「油を注がれた者」になったことに基づき、バビロン捕囚によってダビデ王朝が断絶した後、いつの日かダビデ家を再興するメシアが現れるという信仰がユダヤ人の間に生じたからです。

人の命を慈しむ天の王

イエスの弟子たちは、このイザヤの預言はナザレのイエスによって成就されたと考え、さらに一歩進めて「インマヌエル」とは「私たちと一緒にいてくださる神様」を意味し、それがイエス・キリストであると信じました。こうして、ダビデ王家の子孫であるイエスは「私たちと一緒にいてくださる神様」、すなわち「インマヌエル」と呼ばれる王として、天から降誕した方になりました。これは、神の王国を地上に建国するこ

とを目指して、病人たち、貧しい人々、差別されている者たちなど、弱い苦しむ人々に救いの手を差し伸べたイエスの教えと活動に、強いインスピレーションを受けた弟子たちの間から生じた信仰でした。強い者勝ちの頂点に君臨し、人の命を奪うことを意に介さないこの世の王とは対称的に、どんなに小さな命でも大切にする憐れみと慈しみの心を実現したイエス・キリストは天の王であった、とマタイは伝えたのです。

それ以来2000年、人間は「インマヌエル」の誕生を記念するクリスマスを祝いながら、結局、強い者勝ちの歴史を積み重ねてきました。その結果、最近の世界のあちこちで原爆の製造が始まり、歯止めがきかない地球温暖化も急速に進み、今や人類は絶滅危惧種になったという悲観論すら聞こえて来ます。でも決して希望を失ってはいけません。天の大軍と一緒に“Gloria in excelsis Deo” 「天の王の支配を誉め称え」ませんか。そうすれば、必ず“in terra Pax” 地上に平和が来ると信じて。(石田友雄)

「インマヌエルよ、わが君よ」

“Liebster Immanuel, Herzog der Frommen”

クリスマス・コンサートで、私たちは、コラール「インマヌエルよ、わが君よ」を歌い、クワイアがオルガンと共に、J. S. バッハがこのコラールに基づいて顕現祭のために作曲したカンタータ (BWV 123) の第1曲と第6曲を演奏しました。第1曲は全曲を通じて「インマヌエルよ」という呼びかけの音型を繰り返し繰り返し響かせ、天の王、インマヌエルへの熱い憧憬を歌います。

インマヌエルよ、わが君よ、
急ぎ来たれ、救いよ。
わが心は、主を愛し、
燃え、沸き立ち、奪わる。
主を思う喜びに
勝るもの世にはなし。



インマヌエルよ、わが君よ、
わがきみよ、わがこころは主をあいし。
いそぎきたれ、すくいよ。
もえ、わき立ち、うばわる。
主を思う喜びに
まさるもの世にはなし。

オルガン & クラヴィコード ライブ (11月23日)

物語と斉唱で楽しむ
バッハのオルガン・コラール

演奏：宮本とも子／朗読：石田友雄
ハンドベル：バッハの森ハンドベル・クワイア

感動を誘う響き

私が参加している隔週金曜日に開かれる「オルガン音楽研究会」では、石田友雄先生の解説の後で、宮本とも子先生がその日の課題曲をオルガンで弾いてくださいます。今回は、今まで学んできたことを宮本先生のライブ・コンサートで聴けるとあって、早くから楽しみにしていました。

さて、ハンドベルの点鐘で始まり点鐘で終わるコンサートは、石田先生の朗読が導き手となり、人々がコラール斉唱で参加するという、バッハの森ならではのスタイルでした。プログラムは、バッハが晩年にまとめたオルガン・コラール集（「シュープラー・コラール集」BWV 645-650と「ライプツィヒ手稿譜からのコラール集」BWV 651-667）から5曲選ばれ、途中で6曲のクラヴィコード演奏をはさみ、最後にケーテン時代の名曲中の名曲「ファンタジアとフーガ ト短調」（BWV 542）で締めくくるというものでした。

次々と繋がるコラール

オープニングの「来てください、聖霊よ、主なる神よ」によるファンタジア（BWV 651）は、聖霊に「来てください、あなたの燃える愛を信徒の中で点火してください」と呼びかけます。定旋律を彩る対旋律の躍動感に心が弾み、コンサートへの期待が一気に高まりました。

2曲目の「御神より私は離れません」（BWV 658）には、「共にいてください」と神に願う思いが籠められています。先のファンタジアとは対称的な曲想で、次の会衆斉唱に向けて心の準備を促す役割もあつたように思います。

斉唱「起きよ、と呼ばわる物見らの声あり」は、1オクターブと3度という広い音域を力強く歌い上げる歌い甲斐のある旋律です。後に続くオルガン曲（BWV 645）が原曲のカンタータ（BWV 140）の第4曲＝コラール第2節「シオン＝エルサレムは見張りたちが歌うのを聞き、彼女の心は喜びに弾む」の編曲であることは、研究会で繰り返し学んできました。このカンタータが描くのは、花婿であるイエスが花嫁シオンのも

とに来て、婚礼へと至る喜ばしい情景です。「イエスが来る」というキーワードは、次の斉唱へと繋がっていきます。

斉唱「イエスキミよ、今、降り来たるか」のオルガン曲（BWV 650）の原曲は「誉め称えよ、力強い栄光の王なる主を」という全く別のコラールに基づくカンタータの第2曲で、それがエジプトで奴隷にされていたイスラエルの民を、翼に乗せて約束の地に導いた、驚にたとえられる主の姿を描いていることを、研究会で学びました。さらに「イエスキミよ、今、降り来たるか」というコラールの最終節の最後の言葉「飛びかける」と訳されたドイツ語“schweben”は、ひな鳥を心配してその周りを親鷲が「飛び回る」ことを意味していることも教わりました。従ってオルガンの生き生きとした分散和音は、イエスの愛によって死を克服した“私”が、永遠の喜びのうちに飛び回る様子を描いているのです。なんと心が浮き立つような情景でしょうか。

静寂の世界に響く感動

ここで楽器がオルガンからクラヴィコードに変わります。クラヴィコードでは、バッハ家の家庭音楽を想起させる曲が演奏されました。

まず、「アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳」よりコラール編曲「イエス、私が信頼する方」（BWV 728）の愛らしい調べによって、奏楽堂は静寂の世界へと一変しました。その場にいた全ての人が、一音も聞き漏らすまいと全身を耳にしたに違いありません。

続く「クラヴィア・ユーブング第III部」より「4曲のデュエット」（BWV 802-805）については、以前に研究会で石田先生がA・クレメントの解釈を紹介して下さったことがあり、宮本先生もそれに基づいて演奏されたことと思います。この曲を宮本先生はフェリス女学院のオルガンでも録音なさっていますが、クラヴィコードではオルガンと違う親密さが表現され、改めてバッハの音楽の懐の深さに感じ入りました。

クラヴィコードの締めくくりは、バッハの次男、C. P. E. バッハの「クラヴィコードに別れを告げるロンド」（Wq 66）でした。父バッハが世を去ってから30年あまり後の1781年に作曲された作品は、作曲家の魂そのものです。ペーピング（鍵盤を上下に揺らしてヴィブラート効果を出すクラヴィコード特有の奏法）や、広い音域をさまよう旋律が感情の陰影を見事に描き出す様子に、思わず息を飲みました。豊かな音楽表現に大きな音量は必要なく、むしろ音量が小さければ小さいほど、聴き手の想像力がかきたてられることを実感しました。

音楽の喜びの普遍性を思う

ここで再びオルガン演奏に戻り、その伴奏で「流れ行くバビロン河の岸边に」を斉唱しました。オルガンから素敵なお和声付けが聞こえてきたので、コンサートの後で宮本先生にお尋ねすると、オルガン音楽研究会

の学びからヒントを得て編曲したと教えてくださいました。「あのときの、あの和声のことだ」と私も思い出し、学びを演奏に生かしておられる先生の姿勢に大いに刺激を受けました。斉唱と、続くオルガン曲（BWV 653b）は、バビロン捕囚という歴史的背景を語る詩篇 137 篇に基づく、悲しみを湛えた美しい音楽です。「異教の地にあつて、どうして主のための歌を歌うことができようか」と嘆き、ハーブとオルガンを柳の木に掛けてしまう、その情景が胸を打ちます。

バッハの音楽を真に味わうためには、そこで語られる言葉への理解が必要です。プログラム最後の「ファンタジアとフーガ ト短調」（BWV 542）には朗読も斉唱もついていません。この大曲を音だけ聴けば「なんだかすごい」とは思っても、それ以上のことは分からないかもしれません。まるで巨大な大聖堂を、中に入らずに外から眺めているだけのように……。しかし音楽が語る物語を聞き取ろうと思って聴けば、聖堂に足を踏み入れ、内部の美しさを堪能することができます。私は今日の「ファンタジアとフーガ ト短調」では、バビロン捕囚を歌ったコラールが突きつけた問いに対し、答えが語られたように思いました。故郷を追われる民族の悲劇は、詩篇の時代から何千年もたち、情報が発達して世界中の人が監視できる 21 世紀になっても、相変わらず繰り返されています。音楽が全ての悲しみを癒やすなどということは甘い理想かもしれませんが、今日聴いた「ファンタジアとフーガ ト短調」のような曲がもたらす圧倒的な感動を経験すると、人類の普遍的な喜びとしての音楽の役割を考えずにはいられません。

今回、このような素晴らしいプログラムを用意してくださいました石田先生と宮本先生、そして運営に携われた皆様に心より感謝申し上げます。また「オルガン音楽研究会」では 2020 年も引き続き「シュープラー・コラール集」が学べることを、とても楽しみにしています。（鴨川華子）

* * *

暖かい音楽に包まれ

水田を背にしてバッハの森記念奏楽堂に入る。やがて、天空からの鐘が鳴り響く。「来てください、聖霊よ、……」ルターのドイツ語原詩から訳された歌詞を、石田友雄先生ご自身が朗読され、このコラールによるバッハのオルガン前奏曲（BWV 651）が演奏されたとき、あの空間は暖かく、しかも力強く私たちを包み込む場となった。「……あなたの燃える愛を彼らの中で点火してください……」と続き躍動する詩。あの空間を聖霊が駆け巡るように、宮本とも子先生によってオルガンが生き生きと奏でられた。

2 曲目の「御神より私は離れません」（BWV 658）を挟んで、3 曲目「目覚めよ、と見張りたちの声が私たちを呼ぶ」（BWV 645）では、見張りの弾んだ声が

私たちを起こすように、天空からの律動があり、やがて、この律動に載って天から花婿イエスが降りてこられるように、厳かにコラールが始まる。あの律動感とコラールの荘厳さとの融合は実に素晴らしい。聴衆の私たちもオルガン伴奏でこのコラールを歌う幸せを楽しんだ。

高い芸術性に敬意

プログラムが進んで、W. ダハシュタイン作詞のコラール「バビロンの河の流れの岸辺に、私たちは痛みを覚えて座り、シオンを想い、心より涙した……私たちは多くの辱めと侮辱を受けて苦しまねばならなかった」を斉唱し、オルガン編曲が演奏された。これはイスラエル民族がバビロンの地に捕らわれの身となった時代を歌った詩であるが、今日の世界でも難民、或いは、いわれのない苦難や辱めを受けている人々が何と多いことか。

このコラールによるバッハのオルガン編曲は 3 曲あるが、今回は、上声部とペダル（足鍵盤）で演奏される大河のように緩やかに流れる深みのある響きに乗って、懐かしい草笛のように定旋律が聞こえる曲（BWV 653b）が演奏された。「多くの辱めを受けて」苦しんだ人々への共感を覚え、私は自然に涙を拭うこととなった。宮本先生の極めて高い芸術性に敬意を表したい。宮本先生の編曲によるオルガン伴奏に合わせて全員で斉唱し、コラールの内容を深く味わった。

最後を締めくくる曲として、壮大な名曲「ファンタジアとフーガ ト短調」（BWV 542）が演奏されたが、この曲にも新しい味わいを示していただいた。前の曲に引き続いて、苦しみを受けている人々に寄り添い、慰めるような暖かみのある曲となって伝わってきた。このことに私は深い感銘を受けたのである。

プログラムの中に、バッハの小品 5 曲と息子、エマヌエル・バッハによる 1 曲がクラヴィコードによって演奏された。貴重な演奏であったのに、悲しいかな、私の聴覚は十分に音楽を捉えることができなかった。次の機会には楽器の間近で拝聴したいものである。

このような暖かい音楽の場が、つくば市の一角に存在していること、またここまで活動を継続してこれたことに関して、石田先生をはじめスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます、そして今後のさらなるご活動をお祈り申し上げます。（つくば市在住 大八木規夫）



クリスマス・コンサート

(12月8日)

合唱：バッハの森クワイア（指揮：比留間恵）
オルガン：鈴木由帆
ハンドベル：バッハの森ハンドベル・クワイア
朗読：石田友雄

喜びを共有した演奏

私がバッハの森で学び始めてから、あっという間に16年の歳月が過ぎました。この16年で、私は自分の音楽観はもとより、人生観も大きく変わったと感じています。コンサートとそれに向かう練習では、いつも新しい発見があり、学び続ける幸せを実感していますが、特に今回のクリスマス・コンサートで感じた多幸感格別でした。コンサートの最中に私の脳裏に浮かんでいたことは、「“バッハの森”は“この世”にはない」＝「ここで得られる音楽と学びは、他のどんな楽しみとも違う」ということです。なぜそう思ったのか、極めて私的な感想になりますが、自分なりに感じたことを書かせていただきます。

仲間の声が自分の声に聴こえた感動

学生時代に音楽を専門的に学ぶ機会を得た私ですが、そこで得たものはやはり技術に関することが中心でした。また「“自分が”どう表現するか」という訓練で能動的になれた反面、音の上でも利己的になってしまうことが多かったと思います。バッハの森でクワイアに参加する中でも、それは頭から離れることがありませんでした。「上手に歌いたい」「自分（の声）を生かしたい」という思いと「他者の中に自分を融合させたい」という思いが、常に葛藤していました。思えば、音楽だけではなく、自分自身の在り方としても、そのような考えに頭を悩ませ続けてきました。それでも私は、自分の思いにじっくりくる答えを、いつも「自分の中にだけ」探し求めていたような気がします。

今回のコンサートの中で、歌いながら「一緒に歌う仲間が自分の声だ」との思いが突然湧いてきました。心情的比喩ではなく、実際の音として感じたのです。音楽を始めて以来、誰と一緒に演奏してもこんなふうには考えことはありませんでした。「一緒に演奏している誰もが同じことを考え、目指している」ということを、身をもって感じたのです。お互いの声や音をよく吟味し、試行錯誤を重ねてきたことが、突然結実したような思いになりました。胸が一杯になって、うまく息が出せなくても、周りから聴こえてくる声が自分の声になってくれる・・・そんな安堵と確信に包まれて歌うことができたのは、初めての経験でした。

コンサートを終えたクワイア・メンバーの様に満足そうな表情や会話にも、とても満たされました。そこには、(11年前に亡くなった、バッハの森の創始者でオルガニストだった)石田一子先生に教えていただいた、「音楽は、誰かと一緒に演奏することによって、より素晴らしくなる」という言葉が実現した姿があったと思います。バッハの森の、そのクワイアの一員でいられることの幸せをしみじみ噛みしめました。他者と思いを共有し、他者の喜びを自分も喜ぶこと、他者の姿の中に自分が求めている答えがあること。それを実感し認識できたことが私にとって大きな収穫でした。

音楽を通し天に向かって生きる

バッハの森のコンサートは、単に楽曲を楽しんだり、練習の成果を披露したりすることだけを目的としていないと、前から思っていました。演奏の完成度が高いかどうかだけでは測れない価値があるということです。お客様に聴いていただく演奏者としては問題があるかもしれませんが、学習者としての私は、プログラム全体を貫くテーマを、「過去の人々がどのように受け止めてきたのか」「今、ここにいる私は、それをどう捉えるのか」「それを踏まえて、どのように演奏するのか」と、いつもコンサートの本番まで思索を続けてきました。

その最大の手がかりは、やはり友雄先生の「メディタツィオ」です。今回は、マタイによる福音書のイエス・キリストの降誕にまつわる物語でした。昔から民衆は「強い王による安定した統治」を求めてきたから、ヘロデ王が新しい王の誕生を恐れて、自分の王位を守るために幼児を殺戮し身内の肅正まで行なったことは、何も彼だけではなく、権力者たちが今日まで世界中で繰り返し続けてきたことです。しかし、そのようにして保たれた安定は、決して民衆が真に望んでいたことではない。「弱者を顧み、自分たちと共に居られる救い主を、長い間ずっと待っているのだ」。このような説明を聞き、その思いを様々な形で表した聖書の言葉、カンタータやコラールを通して、天の王による統治を信じて待ち続け、「最愛のインマヌエルよ」「私の魂の救いよ」「いと高き宝よ」と呼びかける人々に思いを馳せると、自然と自分の歌声にも力が籠まりました。そして、信じることを止めず、真理を求める人々の心や営みは、現代の私たちにとってこそ必要であると痛感しました。ともすると、そのようなことから目を背け、危機的な状況をあきらめて傍観し、享乐的に生きることが簡単にできてしまう今の世の中で、「希望を捨てない」というメッセージの力強さに、魂が奮い立つ思いでした。

今、自分のいる世界を天上にするのは、「他を尊ぶことができるか」にかかっていると思います。歴史や文化や音楽を学び、それらを通して昔から幾多の人々が考えてきたことを吸収し、「自分とは何か」「自分はどうか歩むべきか」と自問し、「今ここで」他ならぬ自己を創り上げていくことに、大きな魅力を感じます。バッハの森で学ぶことは、私にとって天に向かって生きること、そのものなのです。(岩淵倫子)

クリスマスの音楽会 ～影絵で綴るクリスマスの不思議なお話～ (12月15日)

ハンドベル：ハンドベル・リンガーズ
ハンドベル・クワイア
合唱：声楽アンサンブル
器楽：器楽アンサンブル
オルガン：並木聡子、別所香苗
影絵制作：比留間恵、別所香苗
朗読と進行：岩淵倫子

心も呼吸も一つに

喜びを分かち合った音楽会

天もこの日を心待ちにしていたかのように、青空澄み渡る冬晴れの日、木造の暖かい温もり溢れるバツハの森記念奏楽堂で、今年も「クリスマスの音楽会」が開かれました。

小学生のハンドベル・クラブ、「ハンドベル・リンガーズ」としては、3度目のクリスマスの音楽会です。リンガーズの子どもたちは、先生方やハンドベル・クワイアの皆様に見守られながら、そしてまた会場いっぱいにお集まりいただいた皆様に見守られながら、呼吸をひとつに、心もひとつに、フランスのクリスマスの歌「ディング、ドン、鐘が鳴る」を演奏しました。ハンドベルを振る手が、まるでお互い見えない糸でつながっているかのように演奏する子どもたちの姿が、そこにはありました。ハンドベルの魅力は、「お互いの存在を感じ、呼吸を合わせることで、お互いの音の響きをさらに高め合い、一つの曲を演奏すること」です。子どもたち自身がハンドベルの魅力を会場中に伝えているかのようにでした。

静けさのうち神聖な美しさを感じさせる、朗読と歌とともに映し出される影絵の世界を楽しみ、パイプオルガンの荘厳な音色と声楽アンサンブルの澄み渡るような歌声を聴いた後、最後に器楽アンサンブルも参加して、参加者全員でイギリスのクリスマス・キャロル「来たれ、友よ、ベツレヘムに」を歌い、歌声を奏楽堂いっぱい響かせた頃には、初対面であったはずの参加者同士が、いつの間にか音楽の魔法にかかったかのように一体感を覚え、共にクリスマスの喜びを分かち合っていました。(八田美穂)



ハンドベル・リンガーズ

クリスマス祝会 (12月15日午後4時30分～7時)

司会：比留間恵
オルガン：宮本とも子

楽しさ盛り沢山の集い

窓の外には燦めくツリー、棚には小さな素朴なクリッペのお人形、そしてテーブルには所狭しと置かれたご馳走の数々。バツハの森の扉を大きく開け放ち、大勢のお客様を迎えた「クリスマスの音楽会」が賑やかに終ると、今度は扉をそっと閉めて、「バツハの森の会員と家族のためのクリスマス祝会」が幕を開けます。今年の祝会は、ハンドベル・リンガーズの5人の子どもたちとその家族や会員と家族の方々も大勢参加して、とても賑やかな楽しいパーティーになりました。

食べ盛りの子どものたちのお陰で、皆さんが腕を振るって持ち寄ったご馳走のなくなるスピードの速さに、目を丸くしながらお話しに花が咲きます。ご馳走でおなががいっぱいになると、奏楽堂に移って次のお楽しみが始まります。まずはリンガーズの、あきみちゃんの可愛いトランプ手品に大喝采、続いてはるばる新潟からいらした、すっちゃんのアルトの深い歌声に聞き惚れ、その後はリンガーズの佐藤兄弟のお母さん、恭子さんの鍵盤ハーモニカの熱演に衝撃を受けました。波が迫りうねってははじけるような迫力は、もうプロ級のジャズ演奏でした。

それから、一番長く飛ぶ紙飛行機を作って飛ばす競争で盛り上がった後、サプライズがありました。宮本とも子さんがクラヴィコードについてお話ししてから演奏してくださったのです。それまで元気にはしゃいでいた子どもたちは、クラヴィコードを囲み、その密やかな美しい音色に聴き入っていました。

祝会の最後に、とも子さんの素晴らしいオルガン伴奏にあわせて、クリスマス・キャロルを次から次にみんなで歌いました。来年もこのような楽しい日を無事に迎えられることを願いながら、祝会の翌日にある方からいただいたメールに「バツハの森に新しい風が吹きましたね」とありました。新しい年もバツハの森で皆さんと一緒に楽しく歌い続けたいと願っています。(別所香苗)



祝会の乾杯

10. 5, 31 **運営委員会** 参加者 5, 4 名。
 10. 13 **台風の後片付け** 参加者 2 名。
 10. 20 **訪問** L. アヴォット氏、S. ディーク氏、赤坂礼子氏。
 11. 2, 23 **運営委員会** 参加者 5, 6 名。
 11. 10 **参加 ノバホール音楽会** 参加者 18 名。
 11. 22 **オルガン調律** 河内克彦氏、アシスタント 1 名。
 11. 23 **「オルガン & クラヴィコード・ライブ」**
 演奏：宮本とも子氏、参加者 57 名。
 11. 24 **オルガン見学会** (BEATA オルガン練習室)
 参加者 12 名。
 11. 28, 29 **クリスマス飾り付け** 参加者 4, 5 名。
 11. 30 **「クリスマスの音楽会リハーサル」** 参加者 13 名。
 12. 1 **クリスマス飾り付け** 参加者 3 名。
 12. 8 **「クリスマス・コンサート」** 参加者 36 名。
 12. 14 **運営委員会** 参加者 4 名。
 12. 15 **「クリスマスの音楽会」** 参加者 88 名。
「クリスマス祝会」 参加者 33 名。
 12. 19 **クリスマス飾り付けの後片付け** 参加者 4 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

10. 5 第 455 回、三位一体後第 10 主日のカンタータ
 「私たちが取り去ってください、主よ、誠なる神よ」(BWV 101)；コラール「取り除きたまえ」。
 オルガン：J. S. バッハ「天の王国にいます私たちの父よ」(BWV 737)、並木聡子。参加者 8 名。
 10. 19 三位一体後第 12 主日のカンタータ「誉め称えよ、主を、私の魂よ」；コラール「御神の御業はことごとく善し」。オルガン：J. S. バッハ「神がなさること、それは善くしてくださることです」(BWV 69a/6)、笠間きよ子。参加者 6 名。
 10. 26 第 456 回、オルガン：J. G. ヴァルター「神がなさること、それは善くしてくださることです」、笠間きよ子。参加者 7 名。
 11. 2 三位一体後第 17 主日のカンタータ「ああ、愛するキリスト者たちよ、元気を出せ」(BWV 114)；コラール「ひるみ恐れるな、主にある友よ」。
 オルガン：J. S. バッハ「目覚めていても眠っていても」(BWV 114/7)、安西文子。参加者 9 名。
 11. 9 第 457 回、オルガン：F. W. ツァハウ「神が私たちの許に留まっておられないとき」、安西文子。参加者 6 名。
 11. 16 三位一体後第 21 主日のカンタータ「深い悩みより私はあなたに向かって叫びます」(BWV 38)；コラール「深き悩みより」。オルガン：「たとえ私たちに多くの罪があっても」(BWV 38/6)、金谷直美。参加者 9 名。
 11. 30 第 458 回、オルガン：「深い悩みより私はあなたに向かって叫びます」(BWV 687)、金谷直美。参加者 7 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア** (混声合唱) 10. 5/14 名、
 10. 19/9 名、10. 26/14 名、11. 2/14 名、
 11. 9/14 名、11. 16/13 名、11. 30/13 名、
 12. 7/16 名。
オルガン音楽研究会 10. 11 /9 名、10. 25 /8 名、
 11. 8 /7 名。
コラール研究会 10. 11 /4 名、11. 1/5 名、11. 8/8 名。
クラヴィコード・オルガン教室 10. 11 /3 名、11. 8 /3 名。
オルガン・クラブ 10. 4/3 名、10. 18/4 名、11. 1 /3 名、11. 15/3 名、11. 29/1 名。
ハンドベル・クワイア 10. 26/7 名、11. 9/6 名。
声楽アンサンブル 10. 19/6 名、11. 2/6 名。
器楽アンサンブル 11. 9/4 名、11. 30/3 名、12. 8/4 名、
 11. 30/3 名、12. 8/4 名。
読書会：聖書 10. 5/5 名、10. 19/2 名、10. 26/3 名、
 11. 2/4 名、11. 9/3 名、11. 16/4 名、
 11. 30/3 名。
ハンドベル・リンガーズ 10. 20/10 名、11. 10/13 名、
 12. 1/9 名、12. 15/10 名。
声楽教室 12. 7 /2 名、12. 15/2 名。
チェンバロ教室 11. 8/2 名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
 10. 1/1 名、10. 2/1 名、10. 4/3 名、10. 5/2 名、
 10. 9/1 名、10. 10/2 名、10. 11/3 名、10. 16/1 名、
 10. 17/1 名、10. 18/4 名、10. 19/1 名、10. 23/3 名、
 10. 24/2 名、10. 25/1 名、10. 29/1 名、10. 30/1 名、
 10. 31/1 名、11. 1/4 名、11. 2/2 名、11. 5/1 名、
 11. 6/1 名、11. 7/1 名、11. 8/3 名、11. 9/2 名、
 11. 12/1 名、11. 13/2 名、11. 14/1 名、11. 15/3 名、
 11. 16/2 名、11. 18/1 名、11. 20/1 名、11. 21/2 名、
 11. 22/1 名、11. 23/1 名、11. 27/2 名、11. 29/1 名、
 11. 30/1 名、12. 1/1 名、12. 3/2 名、12. 5/1 名、
 12. 6/1 名、12. 7/1 名、12. 8/2 名、12. 10/1 名、
 12. 11/1 名、12. 13/1 名、12. 14/2 名、12. 15/3 名、
 12. 21/1 名。